エペソ人への手紙
パウロがエペソの町にいた時の出来事には興味深いものがあります
それについては使徒の働き 19 章に書いてあります
エペソは大都市でギリシャとローマの神々への礼拝の中心地でした
パウロはそこで 2 年以上伝道をし多くの人がイエスを信じました
それから数年後ローマによって投獄されてから
パウロはこの手紙を書いています
手紙の中身はきれいに二分されます
前半では福音のストーリーについて述べ
イエスの生涯と多民族からなるその共同体は
まさに歴史のクライマックスであると説明します
後半はですからという言葉で続きパウロは福音が私たちのストーリー
また生活のあらゆる側面に影響を与えるべきだと言います
私たちの内面や人間関係家族や社会との関係など
すべてにおいてです詳しく見ていきましょう
1 章は父なる神がイエスを通してしてくださった
驚くべきことをほめたたえるパウロのユダヤ式の美しい詩で始まります
父なる神は永遠の昔から契約の民を選んで祝福する計画がありました
ここは創世記 12 章 1 節から 3 節のアブラハムへの約束を思いださせます
そして今イエスを通して誰もがこの家族に加えられることができるのです
イエスの死は私たちの最も酷い罪と過ちからも贖ってくださり
そこには神の恵みを見出せます
そしてその恵みによって
人生のすべての側面を新しく理解する道が開かれたのです
パウロは 1 章 10 節で神の目的は天にあるものと地にあるものを
キリストもしくはメシアにあって一つにすることだと言いました
神の計画はメシアなるイエスにあって一つとされた
贖われた人々の大きな家族を作ることだったのです
この目的は我々がこの家族に加えられた時にはっきりした
とパウロは言います
これはアブラハムの子孫であるユダヤ人という民族に対する言葉でしたが
パウロはさらに非ユダヤ人に向かってあなたがたもイエスとその救いについて聞き
聖霊の働きによってこの家族に加えられていると言いました
パウロはここで使徒の働きに書かれているように
聖霊がユダヤ人と非ユダヤ人をイエスにあって一つの家族としたと述べています
それは神がずっと前にアブラハムに約束したことでした
またこの詩の中でパウロがまず
父なる神次に子なる神イエス最後に聖霊について語り
三位一体の神が共に福音のストーリーの中で働いている点も見事です
次にパウロはイエスに従う者たちが知識だけでなく
福音の力を体験できるようにと祈ります
そうすれば彼らはイエスを死からよみがえらせ
世界の王にしたのと同じ力によって活力が与えられます
2 章では 1 章で取り上げた大事なテーマをさらに掘り下げています
特に神の恵みについて
また多民族からなるイエスの新しい家族についてです
パウロはまず非ユダヤ人がいかにしてイエスを知ることが

できたかという話を改めて語ります
イエスについて聞く前の彼らは罪と自己中心にとらわれ
生きる目的もなく闇の力に欺かれ
体は生きていても霊的には死んでいました
しかし神はその驚くべき愛とあわれみによって彼らを救い
すべての罪を赦し
彼らの命をイエスのよみがえりのいのちに結び付けることによって
彼らに再び命を与えたのです
イエスによって新しく造り変えられた彼らは
神に与えられた使命や目的仕事を見出していく喜びを得ました
神の恵みを示されただけでなく新しい家族に迎え入れられたのです
イエスの福音を聞くまでは非ユダヤ人たちは
神から切り離されていただけでなく
神の契約の民アブラハムの家族からも切り離されていました
シナイ山で与えられた律法はアブラハムの家族との境界線となり
ほとんどの非ユダヤ人は隔てられる結果となっていました
しかしイエスがトーラーの戒めを成就したことによって
その境界線は取り除かれました
こうして二つの民族は新しい一人の人に作り上げられて
平和に生きるとパウロは言います
パウロは 3 章で非ユダヤ人に福音を伝えるという
特別な役割を与えられたことへの驚きと喜びを述べています
そして牢獄に入れられてはいるけれども神の契約の家族が
ここまで大きくなっていることを神に感謝しています
そしてイエスに従う者たちが聖霊によって強められ
彼らに対するキリストの愛をよく理解することができるように
という祈りでこの手紙の前半は閉じられます
手紙の後半ではパウロはガラッと調子を変え
福音のストーリーに対して
自分の生き方をもって応答するように読者に迫っています
4 章はまず教会における日常生活についてです
教会はいろいろな人が集う大きな家族だが
一つなのであるとパウロは強調します
この一つがこの章のカギです
彼らは一つの聖霊によって結ばれた一つの体であり
一つの信仰によって一つの主を持っていて
一つの洗礼を受け一つの神を信じています
しかしこの一致はすべてが同じという意味ではないとパウロは言います
イエスの新しい家族にはさまざまなタイプの人たちがいます
みんな一つの聖霊から力を受けお互いのために
それぞれの賜物や情熱を発揮して
仕え合い愛し合い教会を建て上げるのだと言うのです
彼はそれを二つのすばらしい比喩を使って説明します
一つは教会を新しい神殿として建て上げること
もう一つは彼らはみなイエスをかしらとする新しい人になるということです
この新しい人の比喩については続く章でもさらに説明されています
パウロはすべてのクリスチャンに向かって古い服を脱ぐように

自分の古い人を脱ぎ捨て神のかたちが回復された新しい人を身につけなさい
と言っています
そして新しい人と古い人について詳しく比較しています
新しい人は嘘ではなく真実を語り怒りを抱く代わりに
穏やかに問題を解決します
盗む代わりに惜しみなく与え噂話に興じる代わりに
人を励ます言葉を口にします
復讐する代わりに赦し性的快楽を追求する代わりに自制します
そして酒に酔う代わりに聖霊に満たされるのです
それからパウロは聖霊の影響が 4 つのかたちで現れることを詳しく説明します
最初の 2 つは歌を伴います
みんなで共に歌いまた一人で歌うのです
イエスの民の生活における聖霊の働きが
まずは歌と音楽だとパウロが考えているのは興味深いことです
3 つ目はすべてのことに感謝することです
そして 4 つ目の聖霊の働きはイエスに従う者に
自分を他者より低くさせ他者を自分より高くさせることです
この 4 つ目については
クリスチャンの結婚生活においてどう作用するか詳細に語ります
イエスに従う妻は夫を敬い夫婦の責任を託すことを求められています
夫は自己中心的な願いを放棄し妻を愛し託された責任を
自分より妻のために果たすように求められています
このような結婚は福音のストーリーの再現だとパウロは言います
夫のあり方はイエスとその愛と自己犠牲に倣うものであり
妻のあり方はイエスに愛され新しくされる教会に倣うものです
パウロはこの原則を子どもと親　奴隷と主人にもあてはめます
最後に信徒たちに霊的な戦いについて注意を与え
パウロはこの手紙を閉じています
悪霊はイエスの民の一致を乱し彼らの新しい人を弱らせようとする力です
だからしっかり立って神の武具を身に着けるようパウロは訴え
この比喩について詳しく述べます
この比喩はイザヤ書のメシアなる王について描かれている
箇所を下敷きにしています
私たちはイエスの体の一部なのですからメシアに従う者として
メシアに備わっているものを身につけなければなりません
具体的には積極的に祈り聖書を読み
イエスの共同体として生きる習慣を身に着ける中で
イエスに従う者として成長することです
この書はパウロが福音のストーリーをまとめ
それが私たちの人生のストーリーをいかに造り変えるかを教える手紙です
これがエペソ人への手紙です

【要約】
パウロがエペソの町に滞在し、エペソの重要性について説明し、2 年以上にわたり伝道活動を行った後、ローマでの投獄時に書かれた手紙を要約します。この手紙は二つの部分に分かれ、前半では福音のストーリーとイエスの役割に焦点を当て、後半では個人の生活に福音が与える影響について語ります。1 章では父なる神がイエスを通じて行った計画とイエスの贖罪の役割について述べ、イエスを通じて全ての人が神の家族に加わることができることを強調します。2 章では非ユダヤ人の救いと神の恵みについて説明し、新しい家族としての共同体を強調します。3 章では非ユダヤ人への伝道の重要性に触れ、感謝の念を示します。4 章では教会の一体性、個人の変革、家庭生活に関する指導を提供し、クリスチャンの生活における聖霊の働きに焦点を当てます。最終的に、5 章では霊的戦いに備え、イエスの体の一部としての役割を強調します。この手紙は福音のストーリーをまとめ、信者がその影響を生活全般に持ち込む方法を示しています。